

佳作

夏の家族

第一篇 「出会い」

夏服にアイロンをかけて

日傘の手入れをして

母さんは街に向かった

軽やかな白いワンピースには

幾つもの花柄の刺繍が踊っていた

沢口
リリキ

蝉も鎮まる夏の正午

小さなボクは帽子を被せられ

洗い立ての運動靴を履き

母さんのスカートの端を掴んで

遅れまいと早足で歩いた

道すがら炭酸ジュースを買い

二人で半分ずつ分けた

冷たい細かな泡の粒が

渴いた喉を通りぬけるとき

爽やかな痛みがはじけた

街の時計台の下で

誰かが母さんに手をふった

白い歯だけが大きく映って

乱反射した夏の光の奥で

その人は影絵のようだった

そして小さなボクより

少し背丈の低い男の子が

同じように怖々と

その人の後ろに隠れながら立っていた

母さんは胸の辺りで手を振り

見上げてみたら笑顔が

花のように咲いていた

濃緑の樹木から蝉が多く目覚めて

向き合った四人の頭の上で鳴いた

いつまでもいつまでも　　鳴いていた

それは遠い夏の日の記憶

あたらしい父さんと弟との

出会いだった

第二篇 「それから」

家の小さな庭に

夏の朝が来た

陽が昇る前の時間は仄暗く

むらさきの靄と湿った土の匂いが

立ちこめていた

夏休みに入ったボクと弟は

父さんを見送る為に早起きし

白んだ庭に咲いた

青い朝顔を

無言で眺めていた

まな板を叩く

母さんの朝支度が

縁側まで響いて

息を潜めていたはずの弟は

ごくり、と喉をならした

湯気立つ味噌汁をすすって

四人で囲む食卓は

いつもと変わりはないが

新聞に目を通す父さんに

夏休みは無かった

麦茶を飲み干し

空が強烈な陽の光を放つと

蝉が鳴き出して

ボクと弟は眩しい庭に出た

青い朝顔は

花びらを閉じて眠っていた

あんどん支柱に蔦をからめて

庭の中央に咲いた青い朝顔

「暁の海」と

父さんは教えてくれた

親しげに咲き

我が家の庭を彩り

朝にだけ顔をのぞかせる

ボクらの五番目の家族

それは遠い夏の日の記憶

あたらしい家族での

朝のひとつきだった

縁側に置いた

蚊取り線香の煙が

低くゆつくりのびて

父さんと母さんの遺影の前で
しずかに夏の到来を告げた